森台（もりだい）

江戸時代以前は、西木流の西側、東森台と現在の東約百㍍に中森台があった。この村は、北半分が湯川村という変わった村で、それぞれに神社と寺がある。現在西木流となっている墓地には東森台があった。『会津古墨記』『会津鑑』に、延徳年間（一四九〇年頃）に佐瀬七郎盛滋が館を築いたとある。

樋口光義墓

森台の曹洞宗清松寺境内には、幕末から明治時代にいた会津藩士樋口万太郎光義の墓がある。辛子明太子を作った樋口一族で、一五〇石、森台に避難した剣の達人で、周辺に弟子が百人いたとされる。

江安山清松寺（森台地区）

曹洞宗。東山町天寧の正法寺末寺。本尊は阿弥陀如来。檀家数は吉田家の二戸。草創の年代は不明。会津藩士で山神流兵学者、延享三年（一七五〇）没、剣術師範で門弟が百数人いたとされ、この地で亡くなった樋口伊左衛門光義の墓碑がある。

蟻通稲荷神社（森台地区）

氏子数十六戸、祭礼は七月十五日。宮司は住吉神社であったが現在は喜多方市塩川町常世の宮司。倉稲魂命（うかのみたまのかみ）を祀る。創建の時代は不詳。蟻通稲荷に油揚げを奉納し、堂床下の土を振るって持って行き蚕に振りかけると蟻の食害がないといわれていた。

米沢藩の本陣となった森台小野家

会津若松市高野町森台は、一八六八年の戊辰戦争時八月二十三日から九月二十二日にかけて戦われた鶴ヶ城籠城戦の時、九月十七日、『若松記』会津藩は塩川の本陣にいた米沢藩に対し、降伏の仲介を依頼した。その時、米沢藩では、高野町森台の小野家を本陣にして、若松城からの使者と話話合い降伏条件を詰めていった。塩川本陣には、土佐藩の板垣退助がいて、小野家と塩川間でのやり取りがあった。

一八六八年九月十八日夜半『米沢藩戊辰文書』に、

「米沢藩の針生虎之助が案内し、会津藩の手代木直右衛門、秋月梯次郎、桃沢彦次郎の三人が使いとなり、森台と申す所、与板衆のいた森台の本陣まで約束の通り召し来たことから、最後の一盃味噌にて振舞い、大小等を取上げて我ら米沢藩士が背負い、若松表の薩摩藩本陣伊地治参謀まで、夜明け前に着いたという。手代木と秋月は、密かに虎之助に依頼し、米沢藩に降伏を願い出てことから、勝常村の米沢本陣に報告されたという。」

同日、城内に米沢藩からの降伏を勧める書状を持った米沢藩士が来たという。そこには『史談会速記録』に

「いまではお戦いになっても仕方があるまいから、今、ここで、降伏なされば、我藩でもって、よろしく取り計らって、殿様御父子の生命には拘はらないようにいたしますから」

ということが書いてあったという。

十九日、『戊辰事情慨旨』に、手代木直右衛門、秋月梯次郎、桃沢彦次郎らが、米沢藩の長倉崎七左衛門を頼り、開城降伏の儀を土佐藩の本営に願いでている。

十九日、『会津開城使者の始末』によると、会津藩の鈴木為輔、川村三助が、松平容保公より降伏の使者を命じられ、一昨日捕虜とした土

佐の人足作吾の案内で、「助命を条件に降伏とする書状案内」が命じられます。はじめは、四方からの鉄砲の攻撃を恐れ、案内を断りますが、明方の出発を承諾した。

二十日暁に鈴木為輔、川村三助は、大広間で重役に挨拶し、土佐の作吾を案内人として、裏御門から、太鼓御門を出て、北追手御門で見送られます。一ノ丁上下並び方より砲烈しく、暫時西郷頼母邸の土蔵に潜み、砲穏やかになると杉田兵庫の屋敷、伊藤又四郎の屋敷に入り、この辺屍数多くあって敵味方も分からないほどだった。沼沢小八郎南塀の小門をくぐり、丹羽勘解由屋敷に入り、西軍がいたことから、大根を抜き取り縄に束ね、肩に担ぎ手拭にてほっかぶり致し、野村梯之助宅より山内蔵人、長谷川勝四郎、井深宅右衛門宅より、大町に出て興徳寺に入り、土手を伝い、馬場口御門へ出て、博労町本六日町之内にあった土佐藩の屋敷に入ったという。『山内豊範家記』によると、先着していた手代木、秋月と対面し、米沢藩重役とも会う。城に帰る時、白きものを振り立て、目印にし矢に留めるようにと重役に聞き、土佐藩から白木綿一反をもらい垣根の竹を切り、木綿を裁断し白旗を作りました。午後十二時頃、大手口を固める薩摩藩の持ち場から五人は城に入ったのである。

同日、『戊辰事情概旨』には、城外にいた一ノ瀬要人、萱野権兵衛に会津藩の桃沢彦次郎と米沢藩の針生虎之助が会い、降伏を説得しますが、聞き入れられなかったという。

また、『会津戊辰戦史』に、町野源之助、樋口源助、芋川大膳が森台村の屯営（小野宅）に出向いている。なお、森台の寺には、剣術を指導しこの地で亡くなった樋口一族の光義の墓がある。

二十一日になると、『戊辰役戦史』に、城内にも変化が現れ、城内の発砲が朝から止まったという。そして、容保公は、重臣将校等を召集し、開城の意志を明らかにして、謹慎天裁を待つの心事を説明し、書をもって家老らに問いたのである。なかには、城中の降伏の建議を信じようとせず、庭樹の下において、一発の銃声とともに胸を射て自刃した日新館医学所の教授、秋山佐衛門ら複数がいた。そして、大内にいた上田学太輔、諏訪伊助、桑原の病院にいた一ノ瀬要人、田島の佐川官兵衛に降伏の意を伝えている。

そして、二十一日夜『会津戊辰戦争』『会津戊辰戦史』によると、長さ三尺、幅二尺の小切れを多数集め、ようやく 縫い合わせ墨で「降参」の文字を入れた白旗を竹竿に結びつけ、翌二十二日の午前十時頃、三箇所に立てている。鈴木為輔、安藤熊之助は、追手手前の正門前に一本立て、一本は黒金御門、もう一本は不明。この時、西軍は、使番、馬を馳せて、命令を各藩の陣地へ伝えて発砲を止めさせた。

これは、日本における白旗降参の最初の出来事でした。 白旗を立てると『会津戊辰戦史』によると、軍監中村半次郎、軍曹山形小太郎らが離れて来たのである。『暗涙之一滴』二十二日、「降伏」の二の字を書する旗が城門に建つと、七日町下及び、小田山上より大砲を発射し、弾丸城上を交互に超え、これを西軍の停戦の命令として伝える号砲があったという。